

ベトナムのツバキ・最新情報

箱田 直紀(人間社会学部人間環境学科)

1. はじめに

本誌1号(2004)の「ベトナムのツバキと切手」と題した記事の中で、ツバキには黄色い花の園芸品種が無いこと、ベトナムや中国南部には黄色い花の自生種があって育種材料として注目されてきたことなどを述べた。

筆者らは、これらの黄色い花の自生種探索を目的に、1980年代はじめから中国中南部の各地におけるツバキ属植物の調査を行ってきたが、1994年からはハノイ大学理学部(現在はハノイ自然科学大学と改名)のチャン・ニン教授との共同で、ベトナムにおけるツバキ属植物の調査を開始した。最近の本年1月の調査においても新種が見つかるというように、調査はまだ途中段階であるが、これまでの経過と、調査の過程で見つかった特徴的なベトナムツバキのいくつかについて報告する。内容の一部が本誌1号の記事と重複することになると思うが、ご容赦願いたい。

2. ツバキの仲間とその分布

ここで、ツバキの仲間というのは、植物学上のツバキ科ツバキ属 *Camellia* Linn. に分類されるやや広い範囲の一群の種のことをいう。日本には、青森県以南の各地にヤブツバキ *Camellia japonica* Linn. とその変種で屋久島周辺に分布するリングツバキ *C. japonica* var. *macrocarpa* Masam.、秋田県から京都府北部の日本海側の山岳地帯にユキツバキ *C. rusticana* Honda、九州や四国から沖縄県にかけてサザンカ *C. sasanqua* Thunb.、ならびに沖縄県の島々にヒメサザンカ *C. lutchuensis* T. Ito、の4種1変種が自生する。

日本国内だけでなく、欧米やオーストラリア、ニュージーランドなどにまで渡って庭園などで広く栽培されているツバキ園芸品種の圧倒的多数は日本産のヤブツバキの系統で、ユキツバキやサザンカの園芸品種も多い。

しかし、植物学上のツバキ属全体でみると、種の分布圏は中国中部以南の東南アジアの各地に及ぶ。図1はツバキ属植物全体の分布図で、太い実線で囲まれた内側が分布圏、中の数字はその地域に分布する種の数を示している。全体で250種余りといわれるが、フィリピンからインドネシアにかけての実線内にはたった1種 *C. lanceolata* (図2) だけが自生し、他の種は全て中国側の実線内に分布する。

その中でも分布する種の数が多いのは中国南部から南西部へかけての一带で、広東省が50、広西自治区が69、雲南省が56種で特に多く、この地域からベトナム北部へかけての一带がツバキ属分布の中心地で、しかも属の起源地であろうと考えられている。しかし、この分布の原図が描かれた1980年前後にはベトナムからの情報がほとんどなかったもので、ここでは南北ベトナムを合わせた総数でも23種にすぎない。

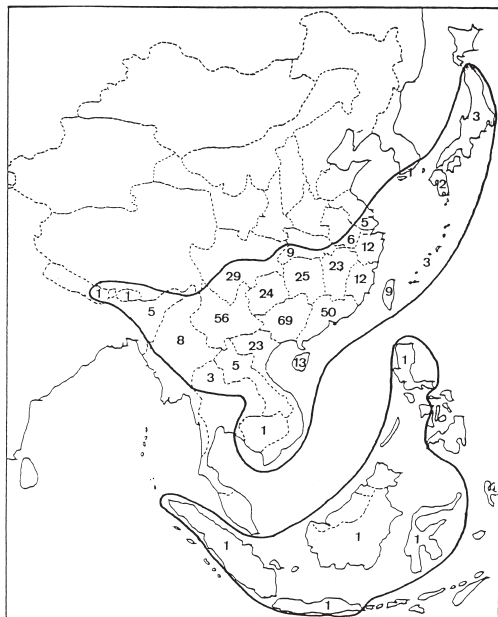


図1 ツバキ属植物の分布

図中の数字はその地域に自生する種の数を示す。1980年前後にはベトナムからの情報がほとんどなかったもので、ここでは南北ベトナムを合わせた総数でも23種にすぎない。

3. 20年前の予備調査

筆者の調査は1885年の予備的調査から本年1月までの9回に及ぶが、調査開始初期には、ベトナムがカンボジア、ラオスとともにフランスの植民地であった頃、つまり、約100年ほど以前に採集されて本国に送られた腊

葉(押し葉)標本からの情報が唯一の頼りであった。しかも、100年前の標本に採集地名などが詳しく記されているわけではないし、かなり詳しい場合でも、かつての森林はその跡形もなく、完全に畑地やゴム園に変わってしまったところが多かった。



図2 *Camellia lanceolata*

1880年代末からフランスの統治下におかれたベトナムでは、1940年代から本格化するフランスからの独立戦争、第二次世界大戦、さらに国が南北に分かれて戦った長いベトナム戦争へと続き、ベトナム戦争は1975年に終結するが、その後も中越紛争やカンボジアとの紛争などが続いて、ほとんど戦火の絶えることがなかった。

筆者がはじめてベトナムを訪ねた1885年1月はベトナム戦争終結からすでに10年が経過していたが、まだ外国人が自由に往来できるようになる少し前であった。それでも、市街地には復興の兆しが濃く、農村地帯は平和で、それまでに何回も訪ねていた中国南部よりもかなり自然が残っていると感じた。ツバキの仲間に関しては、古い資料にある赤い花のハイドゥン *C. amplexicaulis* (Pitard) Cohen Stuart の枝が仏壇に2本だけ飾ってあるのが確認でき、おそらく中国東部から陸路で渡ったと思われるヤブツバキ系の園芸品種が希に鉢植えで飾られていた。また、農村地帯や少数民族の集落の周辺には貧弱であるが茶畑が多くみられた。しかし、学術的な植物研究などどこに足がかりをつかめばよいのかさえわからず、そのままでは10年が経過することになる。

4. 本格的なベトナムツバキの調査

本格的な調査はハノイ大学の植物分類学主任であるニン教授との共同調査が始まった1994年12月からである。この協力体制づくりには、筆者の前任大学の元留学生で、日越間で園芸関係の貿易を手がけるト・ブー・ルーン氏が協力してくれた。

ところで、これらの調査を始めるまでのニン教授の大学での専門は植物分類学であるが、コケと地衣類の分類であったから、最初からツバキ属植物に詳しくはなかったわけではない。いっぽう、筆者らは日本や中国のツバキの種や園芸種については長年の知識の蓄積があるが、専門が園芸であるから、植物分類学の基礎に精通しているわけではない。実は、この専門に違いあって、お互いに不足するところを補完できたということが、その後の共同調査を長く継続できた最大の理由であったかも知れない。

ところで、我々の調査はテントと食料をかついで熱帯のジャングル内を移動するというような過酷なものではない。宿泊所や招待所があって、できるだけ田舎の町に入って宿をとり、翌朝は車で入れるところまで行って、そこから徒歩でその日に帰れる範囲まで行って戻ってくる、という日々の反復である。調査時期が12月と1月に集中しているのは、ツバキのほとんどの種の開花期が最も低温のこの時期になるためである。全調査を通じての同行者は日本ツバキ協会の副会長と理事であった桐野秋豊氏と村内重幸氏で、最近の2回には本学での筆者のゼミ生も参加した。

予備調査を含めれば第2回目(1994年12月)と第3回目(1995年12月)となる調査は、ハノイ市から南や北へ100キロ前後のところであって、早い時期から保護対策がとられてきた国立公園や自然保護区が中心であった。調査対象もフランス時代に標本が採集された地域の探索で、後になって考えるとやや効率の悪い探索法であったが、我々にとってははじめてのベトナムツバキ *C. flava* や *C. petelotii*、*C. amplexicaulis* (ともに本誌1号参照) との遭遇であったからやや夢中であった。

第4回(1998年1月)と第5回目(1998年12月)には、ハノイから東に向かって中国との国境に近いティエンイエンまで、およびそこから北に向かって

ランソン、タッケ、カオバンまでの中国との国境線の少し内側を2回に分けて探索した。この2回の調査行は遠距離移動を伴ったが収穫も多く、12種を新たに確認し、その中の5種を新種としてその後に発表した。

第6回目(2001年1月)は、探索方向が異なる。いままでベトナム国内で確認されている黄花種の分布圏よりもかなり南のゲアン省のラオスとの国境近くで、葉が大きくて細長い新しい種が見つかったので、その確認調査に行くことになった。それが後述する *C. quephongensis* (図5)である。この調査ではさらに南進して、かつての南北国境線を越えてダナン近くまで探索した。かつての国境線近くの山中では今でも地雷が時々爆発するなどおどかさながらの調査であった。

しかし、このころの調査ではかなり効率がよくなっていた。探索地の選定は、①自生種の情報があり、ニン教授が現地の前調査や採集標本からある程度確認済みのところ、②確認はされていないが比較的信頼できそうな情報がある場所、③情報はないが、地形や自然状況から探索が必要と考えられるところ、の3地点を1~2カ所ずつ組み合わせるようにした。ときには、②が不発で③も単なるチャの木であったり、全く別の植物であったりしたこともあるが、①は我々にとっては初見の種であることが多いので、今までに無駄足となった探索行はない。

第7回目(2002年1月)は、調査ではなくて、主として我々のそれまでのツバキ探索の成果を紹介することと、それをベトナムの研究者に改めて認識してもらうために、ハノイ大学とベトナム植物学会、自然保護学会が共催してタムダオ国立公園で開催した「ベトナムツバキのためのナショナルシンポジウム」であった。このシンポジウムには日本から17名、イギリス、フランスなどヨーロッパ各国から20名、ベトナム国内から85名の研究者らが参加して、ベトナム産ツバキがベトナム国内と世界から正式に認知されることになった。

その後の第8回(2003年12月)と第9回(2005年1月)では、どちらかというときまで大回りして主にベトナム北部をまわってきたので、この間の空白地を埋めることと、および、ほとんど未調査の南部まで足をのばすこ

とになった。その中で、新たな紅花種が発見され、いっぽうでは、中国からベトナムへかけての黄花ツバキの分布範囲の修正が必要になったので、以下でそれらについて触れておく。

5. 黄色いツバキの分布範囲

調査の過程で発見されたり、再発見されるツバキの仲間には、花の色からいうと白色と紅色と黄色のものがある。しかし、モッコクやゴールドニア、ナツツバキなどツバキ属と近縁のツバキ科の花色やツバキ属内でも圧倒的に白花の種が多いことなどから、ツバキ属の基本的な花色は白で、紅花や黄花はこの属が進化する過程で、比較的后になって獲得した遺伝形質と考えられている。しかし、筆者は最近では、黄花のグループは、形態や分布の特徴からツバキ属の中では原始的な一群であると考えられるようになった。

ところで、図3は中国でこれまでに確認された黄花種の分布に、今までベトナムで見つかった黄花の分布地を加えてプロットしたもので、黒丸が黄花ツバキの発見地である。これから見ると、植物の分布に国境はないから、黒点の分布する範囲が黄花ツバキの分布圏と言えそうである。実はこの一帯は、中国南部の桂林市あたりからベトナム北部へかけて石灰岩の

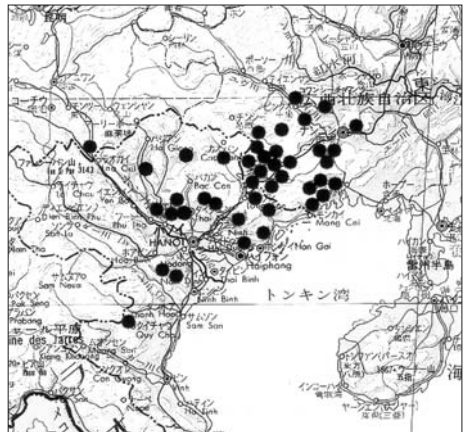


図3 黄花ツバキの分布

山々が延々と連なる地域、つまり、古生代の海底に堆積した石灰岩が隆起したカルスト地帯にほぼ一致する。2003年2月にタムダオを会場にして開催されたベトナムツバキのナショナルシンポジウムの時点でも、われわれの認識は黄色いツバキの分布は上記の黒丸の分布する範囲であるとほぼ理解された。

ところが、2003年12月にはるか南のホーチミン市から北東へ120km

ほどのところにある、ナムカットティエン国立公園で再発見された *C. dormoyana* の調査に行っておどろいた。図 12 のようにあまり濃いほうではないが明らかに黄花で、しかも付近の状況から間違いなく自生である。

実はこの種は約 100 年以上も前に南部の数カ所で採集された標本がキュー植物園などにあり、その標本をもとに書かれた Sealy (1958) の著書でも yellowish とされていたのである。しかし、我々の頭の中では黄色い種の分布はベトナムと中国との国境近くという先入観があったため、yellowish というのは誤記か、せいぜいクリームがかった白花（そういう種は他にもいくつかあるので）であろうと決めつけていたのであった。ただし、本種について比較的詳細に記述された 1958 年当時にはツバキ属の下に黄花の種をひとつの分類単位（節）でまとめるという考えがなかったので、*C. dormoyana* は現在黄花の種がまとめられているキンカチャ節とは別の実果茶節に分類されたままである。筆者は本種とキンカチャ節の各種との共通性は高いと考えるようになったので、近い将来には黄花ツバキの一群であるキンカチャ節の分布範囲はベトナム南部まで拡大することになりそうである。

6. ベトナムの紅花ツバキ

2005 年 1 月までの調査で確認された種の自生地をプロットしたものが図 4 で、赤丸は紅花種、黄丸は黄花種、青丸は白花種を示し、黒丸は採集された標本は残っているが、その後今日まで生きた植物が再発見されていない地点を示している。日本のヤブツバキやユキツバキは基本が紅花であり中国にも紅花の種は多い。しかし、ベトナムでは紅花種はむしろ希である。昨年までは、現地で古くから仏壇の飾り花に使われてきたハイドウン（図 13 および本誌 1 号）と筆者らが命名して 1989 年に発表したルブリフロラ（図 14 および本誌 1 号）だけで、そのほかにヨーロッパやアメリカ合衆国内に標本だけがあって、生きた植物体がその後見つかっていない数種だけであった。

ところが本年 1 月の調査で 2 つの紅花種が見つかった。一つは 100 年

以上も前に採集された標本がロンドンとニューヨークにある *C. piquetiana* (Pierre) Sealy (図 15) の再発見であり、他の一つは日本や中国の紅花種に近い新種 (図 16) がはるか離れたベトナムの中部で発見されたのである。このことがなぜ特筆すべきことなのかというと、上述のように白花を基本とするツバキ属の中であって、紅色の花をつける系統が中国南西部の雲南省あたりで進化し、それが多数の種に分化しながら東や北に進み、最終的にたどりついたのが日本のユキツバキやヤブツバキで、これらをまとめてツバキ節として括られてき



図 4 現在までに確認された種の分布

- は紅花
- は黄花
- は白花
- は記録があるが再発見されていない種を示す

た。これらツバキ節の紅花種には花柄がほとんどないことや、花の苞と萼と花弁が明瞭に区別できないで連続的に変化することなど多くの共通性があることがその理由である。したがって、紅花であっても明瞭に花柄をもつベトナムのハイドウンヤルブリフロラは別ルートで進化したものとの考え方である。

ところが、本報告最後で紹介するヨクドンエンシス *C. yokdonensis* (公式には未発表) は花や葉の形態が中国や日本の紅花の種と基本的に同じで、しかも今のところでは、1種だけ飛び離れて自生している変なツバキなのである。もう少し慎重に調査しなければ結論はでないが、調査が進展する

につれて既成概念だけでは理解し得ない新事実が見つかってきたというこ
とらしい。

7. 自然環境の保護と種の保存

自生植物の調査であるから、初期の調査は当然のことながら自然がよく
保存されている国立公園や自然保護区ということになる。ベトナムには北
から南までの各地に国立公園と自然保護区が設定されている。それらの中
には少数民族の居住区が混在するところも多いのであるが、場所によっ
ては(とくに燃料用の)枯れ枝でも一切持ち出し禁止というような厳しいと
ころもあり、自然保護に対する考えも徹底している。しかし、都会近くの山
や湖などでは観光目的の開発が急速に進み、そのために自然破壊も進んで
いることは日本と同じである。

一方、最近の調査ではかなりの奥地や中国、ラオス、カンボジアなど
の国境地帯や少数民族の居住区などに入ることが多くなった。そこまで到
達するには、それぞれ省、郡、村の3カ所の許可証が必要で、さらに移動
距離や手段も次第に厳しくなってきたのであるが、もうひとつのことが明
らかになってきた。それは奥地へ入ればそれだけ自然が多く残っていると
いうわけではないということである。

古くはフランス統治時代以前からのバナナ園や茶園、次いで、換金作物
としてのゴム園やコーヒー園開設のために林地の消失が激しかったのであ
るが、それらのためにはまず平地が開墾された。しかし、近年は地形や気
象条件にあわせて様々な換金作物の導入が試みられている。実際にはす
ぐに定着するものは必ずしも多くないようであるが、近年急激に増えて
きたのがカシューナッツ(曲玉のような形をしたナッツ)の栽培と産地化であ
る。熱帯アメリカ原産のこの植物はベトナムの気候によく合うらしく、平
坦地だけでなく、山の斜面や頂上近くまで比較的粗放で栽培ができるため、
人の居住地の周辺から自然林がほとんど消滅したところも少なくない。

図4をもう一度見てみていただきたい。地図中の黒丸は今から約100数
十年から約50年前までの文献に記録があるか、あるいは標本だけがあつて、

今では生きた植物が見つかっていない、かつてのツバキ属植物の分布地点である。その周辺地域の調査まで完了しているわけではないが、その多くは開発により周辺からも自然林が消滅したところである。分布全地点数に対して黒丸がかなり多く、開発による変化が急激であったことがわかる。

ところで、日本も含めて、貴重な植物などが見つかったときに、乱獲防止のためにその所在地は明らかにしないほうがよいということがしばしばある。筆者もそのように考えることが多いのであるが、少なくとも我々が最近調査したベトナムの数地点に関しては、放任すれば、カシューナッツなどの栽培地に変わり、早ければ数年以内にほとんど確実に森林が消滅するであろうところが多い。本年1月に調査したうちの1カ所では、すでに山道をはさんだ反対側までカシューナッツ園になっていたのであるが、幸いなことに、外国からも貴重な植物を調査にきたということで、残りの自生地部分は省と郡と村で責任を持って保護することになった。しかし、これは希な一例であって、国立公園内などを除けば、多くの自生地で森林の保護が可能な状況ではない。

もうひとつの、種(しゅ)の遺伝子の保存についてであるが、2002年に開催されたナショナルシンポジウムをきっかけに、ハノイ自然科学大学とそれに我々が少し協力して、タムダオ国立公園管理事務所の一角に、ベトナムのツバキ資源を集めるための種の保存園がつけられた。できれば自生地そのものの保護が重要なのであるが、いっぽうでは、貴重な遺伝資源だけでも保存しようとの取り組みがようやく始まったところである。

8. 新しいベトナムツバキの紹介

最後に、主として最近の調査でみつかった新種や新たに再発見された種などについて、花の写真とあわせて報告する。ツバキ属の中での位置づけを示す亜属や節(属と種の間のカテゴリ)の名はカタカナで書くのが正しいのであるが、日本名がまだないものがあるので中国名の漢字で示してある。

- ① クエフォンエンシス *Camellia quephongensis* Hakoda et Ninh (新種/図5)
茶亜属、金花茶節。ハノイ大学のニン教授の同僚からの情報をもとに、2001年1月にベトナム中部寄りのゲアン省クエフォン地区で自生地の調査。花は鮮やかな黄色の中輪で、そのままでも観賞価値が高いが、花形や花色の濃淡に変異がある。比較的離れた3地点の山林中に自生し、個体数は比較的多いが、いずれもすぐ隣まで耕地化が進んできているので保存法の検討が必要である。現地の住民は黄色い花が咲くということも意識しておらず、彼らにとっては燃料以外の何ものでもない。
- ② タムダオエンシス *Camellia tamdaoensis* Hakoda et Ninh (新種/図6)
茶亜属、金花茶節。ハノイの北西約60kmにあるタムダオ山塊の海拔1000m前後のところには、かつてのフランス人のための避暑地があって、現在でもハノイ市民の避暑地になっているが、この山塊の各所からツバキ属の種がみつまっている。本誌1号でふれた切手になった花 *C. petlotii* もそのひとつであるが、本種は別の谷でみつかった花が小型の種である。国立公園内で仏教修行寺院へつながる山中であって比較的個体数も多いので、すぐに絶滅の恐れはないが分布範囲はひとつの谷の中のごく一部分だけである。
- ③ ハコダエ *Camellia hakodae* Ninh (新種/図7)
茶亜属、金花茶節。上記②と同じタムダオ山塊の北側斜面に近い山林中に自生する全体として大型の種。キンカチャの仲間の黄花種は大きいもので花の直径は4~5cmであるが、本種は直径が8cmに達する今までで最大の花を開く。2000年ころにタムダオ国立公園の山林管理人のひとりが発見し、2002年1月にタムダオで開催されたツバキのナショナルシ

ンポジウムで切り枝が展示された。詳細な自生地調査は2003年12月に筆者らが行ったが、発見者でもないし、また花が立派すぎるので筆者の記念にというのは辞退していたのであるが、ニン教授が2003年1月に中国金華市で開催されたツバキの国際大会ですでに発表していた。ただし、まだ口頭発表とその要旨だけであるので、ラテン語の記載をつけて学会誌などで印刷されてはじめて公認されることになる。

④ ドウオンギイ *Camellia duongii* (仮称／図8)

茶亜属、金花茶節。タムダオ山塊の北側にコック山というダム湖を中心とした観光地があるが、本種はそこから東北方に位置する山地の溪流に沿って自生する。2003年12月にはまだほとんどが蕾の状態であったが、花着きが極めてよく、花色の黄色も濃いので園芸的には有望系統である。*duongii* というのはフランスに住んでいてツバキに高い関心をもっているベトナム人の Duong 氏を記念したもので、ニン教授との相談のうえすでに学名まで準備しているのであるが、*C. petelotii* などとは明らかに別種であるといえるだけの確証が得られていないので、ここでは仮称とした。

⑤ ヒルスタ *Camellia hirsuta* Hakoda (新種／図9)

茶亜属、金花茶節。2003年12月に④ドウオンギイの調査に行ったときに、さらに上の沢沿いで筆者が発見した。そのときは1株だけで周囲に別株が見つからなかったが、その後ニン教授の調査で、かなりの数の個体が確認された。花は黄色がやや淡く、若枝や葉の裏などに長毛が密生するので、*hirsuta* (多毛の) という種小名を準備してあって、日本名は「毛深金花茶」にしようなどといっているが、公式発表はまだ済んでいない。

⑥ タンサニカ *Camellia thanxanica* (仮称／図10)

茶亜属、金花茶節。2005年1月の調査の後半で、ハノイ北方のタイグエンから車で入り、さらにオートバイの後ろに乗り継いで石ころの山道を約2時間。ようやく到着した石灰岩の山の林立する地帯で山の斜面に自生していた。比較的大輪から小輪のものまで個体差が大きい、いず



图 5 *Camellia quephongensis*



图 6 *Camellia tamdaoensis*



图 7 *Camellia hakodae*



图 8 *Camellia duongii*



图 9 *Camellia hirsuta*



图 10 *Camellia thanxanica*



图 11 *Camellia megasepala*



图 12 *Camellia dormoyana*



图 13 *Camellia amplexicaulis*



图 14 *Camellia rubriflora*



图 15 *Camellia piquetiana*



图 16 *Camellia yokdonensis*

れも花の色は濃い。分布地はやや離れているが、中国側から発表されたキンカチャと形態上からの明確な差異が見つからないので、現段階では区別のために仮称で呼んでおく。

⑦ メガセパラ *Camellia megasepala* Chang et Ninh (図 11)

原始ツバキ亜属、朧果茶節。ハノイ北方のツェンカン省で採集された標本がハノイ大学のニン教授から中国中山大学の張宏達教授に送られ、1996年に張教授により新種として発表されたが、その後生きた個体は見つかっていなかった。筆者らも1998年に再発見に失敗。2003年12月によりやく自生地に到達した。発表時には花色不明で多分白花であろうとされていたが、実際にはクリーム地に淡いピンクがかかった、今までにない独特の花色のものであった。花の直径が10—11cmにもなる大輪であるが、葉も特別大きいので、植物進化解明の材料としてはおもしろいが、そのままで観賞価値があるというものではない。

⑧ ドルモヤーナ *Camellia dormoyana* (Pierre) Sealy (新種/図 12)

原始ツバキ亜属、実果茶節。さきにふれたように、黄色い花のキンカチャ節の分布圏からはるかに離れたベトナム南部で、2003年12月にほぼ100年ぶりに再発見された黄色い花のツバキ。まだ特性を詳しく解析していないのであるが、筆者は現段階ではキンカチャ節の種、とくにフラバ *C. flava* (本誌1号) に近い種であると考えている。

⑨ ハイドゥン *Camellia amplexicaulis* (Pitard) Cohen Stuart (図 13)

茶亜属、長柄茶節。本種と次のルブリフロラは本誌1号に切手の写真があるが、改めて花の写真載せた。いつのころからかは不明であるが、中部や北部ベトナムでは冬の仏壇の挿し花としてよく用いられていたといわれる。筆者が初めて訪ねた1985年頃には、キクやエゾギク、バラなどが中心で本種はすでにほとんど使われなくなっていたが、最近是一部で切り枝の出荷がはじまっている。写真のように開花しても抱えた花形で、夏のハスの花を思わせることが正月などの仏花として使われた理由かもしれない。ハノイやフエの周辺での栽培が近年確認できたが、自生地はベトナムの西北部とされ、筆者らはまだ現地を確認していない。

⑩ ルブリフローラ *Camellia rubriflora* Ninh et Hakoda (図 14)

茶亜属、離蕊茶節。1989年に新種として発表され、2003年にベトナムで切手の図案に使われた。本誌1号で紹介したが、日本に導入した枝からの接ぎ木苗が開花をはじめている。写真の花は本年3月に東京都夢の島熱帯植物園で展示したもので、個体差があるかも知れないが、花は現地で想像した以上に独特でおもしろい。花着きが極めてよく、そのため葉も花も小型になって、花は開花しても抱えて写真のとおりである。

⑪ ピクエチアーナ *Camellia piquetiana* (Pierre) Sealy (図 15)

原始ツバキ亜属、ピクエチア節。2005年1月にニン教授の学生時代の植物学の恩師であったチー先生が以前に標本を採集したことがある、という記憶を頼りに、ホーチミン北方のドンナイ村を訪ねた。本種はそこから100kmほど離れたあたりで1877年に採集され、標本が現在はキューとニューヨーク植物園にあるが、その後は最近まで生きた植物体は発見されなかった。2002年にオーストラリアの林学研究者らによって再発見が報告されたが、種の保護ということで場所は明らかにされていない。

ところで本種の花はツバキというよりもモクレン花を下向きにしたような形をしていて内側の花弁は花がしほむ直前まで開かない。触れるとかみつかれて痛いアリの花のまわりに群れているので、花粉媒介の役割をしているのかもしれない。立派に結実する。

⑫ ヨクドンエンシス *Camellia yokdonensis* Dung et Hakoda (新種/図 16)

ツバキ亜属、ツバキ節。ベトナム中部のダクラク省のカンボジアとの国境に近いヨクドン国立公園の園長から連絡があり、2005年1月に現地調査した。この国立公園の樹木は乾期の1月には落葉しているものが多いが、本種の自生する一画だけが常緑樹に覆われている不思議なところである。さきに述べたように、本種は日本のヤブツバキやユキツバキ、中国内の紅花のツバキ節の種に近いが、本種だけはるか離れて分布するなど、謎が多い。花はオレンジ色を帯びていて、雨期の8月から咲き始め乾期の2月まで咲き続け、雨期の花はより大型であるといわれる。

参考文献

- Sealy, J.R. A Revision of the Genus *Camellia*. R.H.S. London. 1958.
- 胡先 驪. 中国山茶属与連蕊茶属新種与新變種 (一). 植物分類學報 10 (2):131 - 142. 1965.
- 張宏達. 山茶属植物的系統研究. 中山大學學報 (自然科学) 論叢(1). 1981.
- 広西壮族自治区環境保護局, 広西植物研究所編著. 金花茶彩色図集. 広西科技出版. 1981.
- 梁盛業主編. 金花茶. 中国林業出版社. 北京. 1981.
- Chang, H.T. *Camellia megasepala*. 中山大學學報 (自然科学) 35 (1):79. 1996.
- 箱田直紀・桐野秋豊. ベトナムのツバキ属原種とその新種. 椿 37:22-30. 1998
- Ninh, T. *Camellia rosmannii*: A New Species of Yellow *Camellia* from Viet Nam. I.C.J. 30:72-75. 1998.
- Ninh, T. and N. Hakoda. Three New Species of the Genus *Camellia* from Vietnam. I.C.J. 30:76-78. 1998.